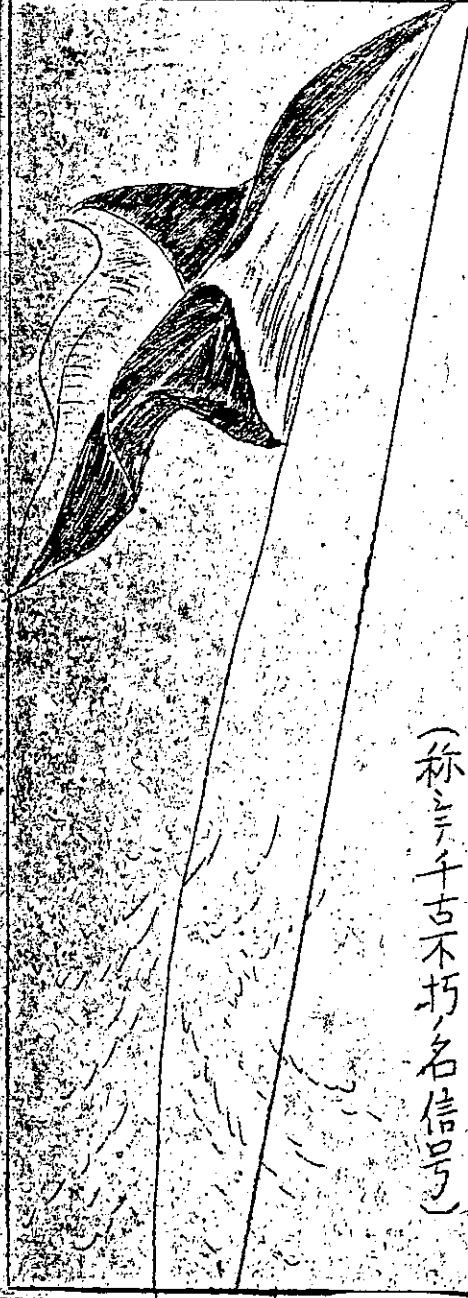


第百六十七号 ぶしでふ
 (海軍記念日號)



「た、かへは、かつが常なる御軍也」

なほいかにかとおもふ時あり
 とは、昭憲皇太后陛下の明治二十八年に詠ませ給ふた御歌と拝承す
 當時か程迄御珍念おらせられしを始め國を擧げて心に念せし其大海戰
 は皇國の興廢を此一戦に負つて上下一丸となつて御國に盡せし力に
 よつて廣古の大捷を博した。今や滿三十二年を迎へて感更に深し。

「當時の三笠艦上の信號旗」

(稱言千古不朽名信號)

學校日誌より

四月二十四日 青年學校の戸田禮子先生來島赴任

四月二十九日 天長節式舉行 終つて神社参拜

四月三十日 児童身体検査施行

五月三日 午前八時より大村消防隊検閲式 大村少年消防隊式舉行

五月四日 午後小年消防隊境神(島木岸實採取)に出動

五月一日 横鎮司令長官米内光政中將を波止場に全校出迎

五月二日 午前七時より海軍記念日祝賀運動會舉行

金品寄贈者芳名

一金五円也 小學校備品費へ 野口 晃殿

一金五円也 小年消防隊へ 渡辺 三朝殿

一金拾円也 保護者會基本金へ 石津 嵩夫殿

右紙上を以て厚く御礼申上げます

尋ニツヅリカタ

ウインドウクワイ

カトウ スム

ボク ハ アサ がツカウヘ イツテ ミ

ルト。モウ ミンナ キテ キマシタ。

ボク ハ スゲ クツヲ 又ギ ソシテ

シバラク アンシデ キルト ハジマリマシ

タ。ハジメ ニ タイサウ ヲ シマシタ。

ソレガ スムト ボタタチ ノ ハタ ヲ

モツテ ハシル ノヲ シマシタ。

センセイ ガ ピストル ヲ ナラスト ボ

アタチハ ハニン デ カケダシマシタ。

スコシ イクト ハタ ヲ モツテ ソノ

ハタ ヲ ウヘ ニ アゲテ ハシリマシタ。

イヨイヨ ボク タチハ ケツシヤウテン

ハイリ ニトウ ノ ゴハウビ ヲ モヲヒ

ヤマダ ハジメ

ボク ハ ウインドウクワイ ヲ スキデス。

カイグンギネンビ ガ キマシタ。ボク ハ

ウレシクテ タマリマセン。

アサ ハヤク オキテ ガツカウ ヲ ミマシ

タ。ハタ ガ キレイデ タマリマセンデシ

タ。ガツカウヘ イクト ミンナ ガウ

レシサウニ レンシフ ヲ シテ キマシタ。

ボク モ シタクナリマシタ。

五月二十四日 ハ ウインドウクワイ デシタ。

アサ オキテ ミルト ソラガ クモツテ

キマシタ。ボク ハ ウインドウクワイハ

キナイト オモヒマシタ。サウシテ ゴハン

ヲ タベテ ガツカウヘ イクト テンギ

ガ ヨク ナリマシタ。サウシテ ハジマリ

マシタ。ラデオタイサウ ヲ シテ ハタ ヲ

モツテ カケルノデ ボク ハ 四トウニ

ナリマシタ。

バンノ キヤウコ

イシジ ヒデコ

カレシイ ヨレシイ 私タチ ノ ウンドウ

ワタクシ ハ ヨンドウクワイデニ ナトウ

クワイガ ハジマリ マシタ。

ヲ トリマシタ。 チヤウド オヨオバチヤン

バンバンザイ ノ トキ 私ガ トラウ

ガ 耳タカラ ミセマシタ。 スルト オヨオバ

トシタハタラ テルチヤンガ トツタカ

チヤンガ、

ラ スコシ オクレモ イツシヤウケンメ

ト イヒマシタ。 マタ コンド ハ ヲタクシ

イニ カケマシタ。 テルチヤンモ 私

タナノ ツナヒキ デス。 ソシテ ナランデ

モ オンナジ ミトウ デシタ。 ソレカラ

カラ デマシタ。

ツナヒキヨ シマシタ。 ツナヒキヨシ

センセイガ フェラ ピイト ナラシタ

タラ デニ マメガ デキデ イタラシ

ノデ ワタクシ ハ ツナラ モツチ スハ

タマリマセンデシタカラ センセイニヨ

ツチ オマシタ。

ドウムヨ ツキデ イタラギマダマダ

ソレカラ ワタクシタサガ

ソレカラ 一年生ノ ワヨ モツチハ

ヨイシメ

シルノガ オモシロフテ タマリマセンカラ

ト イヒマシタ。 スルト アカグミガ

オウエンラ シチヤリマシタ。

ソレヒケレ

ミンナ マツカナ カホラ シチカケテ

ト イヒマシタ。

耳マシタ。 ソレカラ イヤニ ナツタカラ

ソシテ トウトウ シログミガ カチマシタ。

ウラノ 方デスベリダイニ ノツテ

アソビマダマダ

尋三の綴り方

■びやうき 渡辺三朝

學校からかへつて來ると、急に頭がいたくなりました。ぼくは、おかあさんに「頭がいたいからねえよ」といってねました。その晩からねつが上り始めて四、五度近くなりました。それで海軍さねん日にするうん動會や、かえう行列など、とうくやつたり見たりすることが出来ませんでした。日えう日が一番ひどかったのが、月えう日には學校へも行けませんでした。それで、とうく一日休んでしまったので、やくやくてまじりません。くわつ動しやしんも見ぼぐつてしまひました。ぼくは、月えう日にお晝から行かうと思つたけれど、うちの人が「ひどくなるといけないから休め」とおつしやつたので、學校へは行きませんでした。けれど、ぼくは、「けふは休んであしたは行かう」と思

■とむらひ 神山 秀雄

つて、次の日は少しわるかったが、がまんして、學校へ行きました。

夜中におぢいさんが死にました。ぼくは、おぢいさんが死んだといふことを知りませんが、したので、ぐうぐうねておきました。起きると、もう朝でした。ふとんをかたきとすると、おばあさんが「孝雄、おぢいさんが死んでしまったよ」といひました。ぼくはびつくりして、「おとむらひはいつだい」と聞くと、おばあさんは、泣きながら「かなしい」といひました。おぢいさんが「あさつての火えう日だよ」といひました。いよく火えう日になりました。ぼくは、はいを持ちました。けんがうとたかしちんは、うふそくを持ちました。ぼくは、ぼうさんの前でした。そして、おはかまで行きました。せんかうを上げてかへりました。

●おぢいさんになくなられて、どんな氣持がしましたか。おぢいさんのことをどう思ひますか。

あれは御眞影でせうとおつしやいませ
 た。その中にお父さんがおいでになつて
 此の學校はかりの生徒の一人お父さん
 して居るんぢやないや、どいでもおつしやいませ
 おつしやいませした。
 もう明日小笠原へ船が出るといふので
 汽車に乗って帰る時、お兄さんが朝俣
 車場まで送つて来て下さいました。
 さようならと悲しうな
 いはせましたか、あまりかはいさうな
 のでお母さんはふりむくことも出来
 ず、汽車に乗つてかへりました。そして
 汽車の中で、かはいさうなと涙を浮
 べてみた。私もお兄さんがあまりか
 はいさうで今でもその時のことがわ
 くれらなません。

海軍記念日

荏本正子

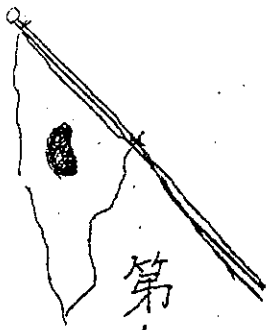
明治三十八年五月二十七日は我が國にとそ
 のためとほれるかつかいの大切な日で

あつた支那元帥のはがきのことでも
 軍艦をよんでんに行ち破る。おれが
 めまは世界に知られた。その日は日本に
 してわすねることのできな日であ
 り、おれはいつまでも、おれはいつ
 にお祝ひをするのです。

朝のうみ

お日さま、海から出たばかり
 として私の心をなやました。
 そこへ、そよべの波がざんぱりこ
 子かにかちよろ、にげ出して
 五つと云はば、逢つて
 今日には、きかぬ船
 何か方には、きかぬ船
 おん／＼と、きかぬ船
 えんとつかち、煙の輪
 うれしい、うれしい、朝のうみ

第五學年生の綴方



日の御旗

沖山光男

國旗といふものはどの國にもあります、中でも日本の旗は勇ましい日の丸でお目出度い
 は、いつも、どこの家でもこの旗を立てます、旗を見ると誰でも心がひきしまり、何となく勇まし
 い気持ちになる、海軍記念日の祝賀運動会に旗をあげる時に軍人は皆敬礼をする、エッパはひん
 實に、心持になつた、あゝ勇ましい日本の國旗。

海軍記念日

田崎文平

明治三十八年五月二十七日は我が海軍とロシアのバルチック艦隊とが戦争をしたのであります、
 我が聯合艦隊司令長官東郷大將は戦争の時のことである、おそげに居たえらい人々が「長官に
 もしものことがあるとだから司令塔におはいり下さい」といふと大將は「いやわしは年をとつ
 てゐる、お前たちは若いからこれから國のためにつくすのだから、若い人こそはいつて、た
 い」といつて甲板の上につ、たつていました、僕はこれはなして先生から聞いて大将の
 つまど勇氣に全人おどろいてしまひました。

お兄ちゃん

浅沼俊

東京に居るお兄ちゃんのことを考へるとさびしくなります、こちらに居る時は
て居ましたがお考へるとなせあんたにけんくわばかりしたりだらうと思ひます、
らに決してけんくわな人かすまいと考へます、お兄ちゃんか此の夏休に遊びに来るから
ません、その時はけんくわして遊びたいのしみにしてあります、早くお兄ちゃんか
思つてあります。

フログスの花

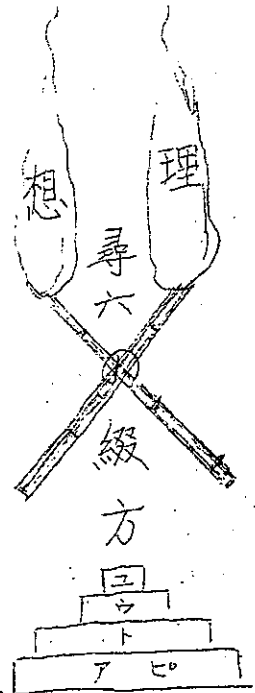
重田 弥生

ねむい目をニすり／＼やう／＼起きてもまきを着かへ顔を洗ひに井戸端へ出た、おせ
が「おせ先生の所からフログスの花をもらつて来た」といつて、顔を洗つておせん、
してから行きなさい」といつた、私はいそいで歯をみがき顔を洗つておせんへお茶を
しておせ先生の所へかけて行つた、お早ふごいませうといふと向から「おせ先生
ます、花ですか、お取りなさい」といつたので急いで玄関の方へ行つてフログスの花を取つた
花は氣持よくパツときれいにさいてゐた、どれを取つていのかわからな、バツにみんなど
れいであつた。

初夏

井上 弘

もう夏の様に暑くなつて泳ぐ人もある、僕は七月にならなければ泳いではいけな
だからいかだを考へて作つてははりばんこにのつて遊んでゐる、夏になつたらもう一
人で天正丸のとこへつりに行きかへりは泳いだり乗つたりするつもりだ。



◎ 僕が村長になつたら 浅沼和夫

僕が父島大村の村長になつたら先づ三月位の間
遠征程度で父島の町や山などを調べてまはりま
す。そして仕事がない人や遊んで居る人を集め
て労働組合を作ります。それから村のどぶ掃除
をして蚊をたぐし、悪い病気の起らないやうに
します。それが終つたら道の悪い所や少し木の
立つて居た所を直します。そして林を開闢して
労働組合の看板を掛けて、家を造り宮をたがやま
せませす。それから学校を直したり、又島民共同の
大きな船を作るために修身にあつた古橋源六郎
のやうに馬でなく雑を飼はせ、一家に必ず三羽
以上居るやうにさせませす。そしてむだ使ひをさ
せないやうにして一銭貯金を村民にさせて村
を金持にし、父島の浅沼村長はともえらくて良

い村長だと思はせるやうにとめるつもりです

◎ 僕が文部大臣になつたら 鶴澤寛

僕が若し文部大臣になつたら、其の事業の一
として貧しい家の人々や不具者中等程度、熱
育を授け、又それで自立の出来るやうに、一つ
職をさづける公立の学校を立てるやうに、帝
議會に提出する。此等の事業は僕がそのや
な境遇に居るからである。もう一つは日本に
科學大學を立てるやうに、議會に提出する。
此の學校はどんな貧しくても帝國大學を優
等で卒業した人々をそれ以上研究させる
の學校である。僕が文部大臣になつたら先
この二つの事を實行しやう。

◎ 僕が百姓になつたら 金川恒男

僕が百姓になつたら農業を盛んにして、こ
大村のために盡し度と思ひます。春はトマ
トやナス、豆などを作り夏は、うりすむくわ
いを作ります。そして今よりも盛んに
地へ送り出し、又かまぼくや人には、たいて野
を食べさせるつもりです。

◎ 私が女醫になつたり 土屋せい子
私が大きくなつて女醫になつたり、小笠原へ歸つて来て父島の人の身体をみてやり、又病氣の人が居たりばすぐ親切になぐさめてやらう。病氣になつても貧乏でおいしやさんにかゝる事が出来な、人はすぐ見てやり、たゞで薬もやつて一日も早く病氣を治し、誰も病氣にかゝらぬやうに衛生のお話を村民にきかせ、この大村には誰一人病人のな、やうにしたと思つて居ます。

◎ この學校がこんなだつたら、小宮山清子
此の學校が海岸の近くで二階だつたらどんなに涼しくてよく勉強が出来るだらう。二階の窓から町が見下されるし、運動場は小さい子供たちが来て泣いたりせぬ、だりした時なども少しもうるさくないだらう。私はこの學校が町の真中にあるので小さい子供達が廊下へ上つて泣いたりさあ、いだりして大へんうるさい。全く此の學校が二階だとよいが。

◎ 世界がお互に仲よく暮したり、沼田節子
世界中がお互に争ひな、トないで仲よく暮して行くことが出来たら、どんなに平和で暮らしていませう。そしてどんなことをしても落ちない飛行機を作つてそれに乗つて世界中を飛ぶ志のやうに行つたり来たたりしたら、どんなに快事な事なせう。月の世界や星の世界などに人がすんで居たり月の世界や星の世界に行かれるやうになつて、此の地球の學問と月や星の世界の學問とをくらべると、月や星の世界の方がずつと進歩してゐるかも知れない、事が分つたらどんなに面白い事なせう。

評 何事につけても今ある状態よりもつとよくしやうと思ふ心を理想と言ひます
人間は理想を持たなければ進歩しません。この世の世々皆さんの理想はまだくらのやうにふわ／＼として骨のないものであります。が、もつと／＼心をみがいて行けば、これが火のやうに燃え立つ時が来るでせう。

高一 潮干

青森縣大湊に住んでおた時のことである。明日はとも潮が引くといふ噂が立つたので、私は馬を見た。なるほど明日は大潮なのだもの、一ツや二ツながら、母に潮干に行くことを願つた。母は空を仰いで、明日は雨が降りさうだよと言つて、潮干に行くことをせしめ、私に願つた。私は早く眠りについた。さて、眠からさめて、食事を持ち、いせせず、潮干の用意をして家を出た。いよく／＼目的地に着いた。もう早くから行つた者は、一ぱいに取つてゐた。ぐく／＼とあちらからもちちうからも砂を握る音が聞え、小さい小魚等が水の中で面白ううと小魚やえびを取つて、わい／＼騒いでゐた。私は之が目にとまると、浅瀬や蛤はそこに置いて、其の中に加つて遊んだ。どんなに面白かつたであらうか、今になつては考へ出せない。出かけてから二三時間、ぬ中に雨がぼつり／＼と降り初めた。其の中に雨はいよく／＼本降りになつて来た。もう海には一人も居なかつた。海岸に建つてゐる休憩所は雨にぬれた人々が一ぱいになつた。其中で雨が降らなかつたら、どんなに面白かつたらうと思つた。ぼさ者は数知れない程ゐた。今から五十年前の思い出である。

内山登美子

児玉成美

今日はよい天気だ。二見岩から奥村清瀬にかけて浅瀬を掘る人が何十人となく居る。皆、こゝにもあつた／＼と言ふ音が振つてゐる。私等は二見岩にかさこを取りに行つた。ばし／＼とわいて水さとはず音がすると一人がかさこだと叫ぶ音がすぐによつて来る。やつこのこと、つかむとすぐには入れぬ、又探す。さうして幾匹も／＼取れる。全く潮干は面白いものだ。

考へてもゐなかつた潮干狩本當に面白かつた。隣浜から奥村の海岸まで行つて浅瀬を掘つた。少しも採れなかつた。小宮山シゲぢ人は澤山採つたやうだ私の爪を見てまだそれだけと言つたのでしやくにははつてやたらに掘つてみた。ががらばかり出て来た。ふさぢ人は二見岩へ行かうと言つたので誘はれるまゝに友達四人で行つた。行く時にはどんなに澤山あるだらうと思つてゐたのに行つて見たら一つも無い。仕方が無いからほちまいで少し採つた。多みぢや人が歸らぬ歸らなくなるからと云つたので大急ぎで海の方にいくともう左手の方の海は深かつた。私は二はくなつて水の中へいざいざ入つて急いで歩いた。ふさぢ人は私を見て笑つてゐた。もう氣はあせつておろく聲でふさぢ人大丈夫と言ふとふさぢ人は一向平氣のやうだ。やうやく岸近くなるるとちかぢ人が靜江さん早くお出でと呼んだのでちかぢ人はよかつたね途中引返しなかつたと言つたら達夫先生がそばに立つて居られた。早く岸へ上らうと急いで歩いたら泥沼のやうな所に足が入つてぬげなくなつた。みんなが笑つて居た。漸くのことと岸についてほつと立ち足は長靴のやうに眞黒になつてゐた。見つともないから池のやうな所で足を洗つた。二野先生が待つてゐて下さつて一しほ歸つた。途中で先生は自分のバケツの中の浅瀬の大さのばかりを上におせて人に大きく見せようとされたので皆大笑した。潮干はいつ行つても愉快なもので。

奥山宣夫

白いシャツが二つ三つ見える。二見岩に人が行つてゐるのだから下を見て何がさかしてゐるかミイ君の様だ。僕は正吉や寛造君とカミサとりに行つた。珊瑚礁の間に手を入れるといふりとしたまががある。僕は思はずいやうなまがだつと叫んだ。すると寛造君が又手を入れかまさが居たと言つたので僕はなだかまがと云つて又他の所を探した。すると寛造君等がやうなまがと言つたので僕はもう水の中へ入る氣になれなかつたが又入つて搜した。其内先生が笛を吹かした。二見岩の方からぞろぞろ人が歸つて行くので僕等も一語に歸つた。

高二作文 「我が尊敬する人物」

杉野夫人

黒川 澄江

あの日露戦争の旅順港閉塞の時、廣瀬中佐と共に名譽の戦死をとげた杉野兵曹長の夫人一家には別にこれと云つて財産があるわけではなかつたので朝は早く遠い機械工場へ通つて一生懸命働いてゐたと云ふ。夫人は又杉野兵曹長にもまけない立派な軍人にしようと思つた。遺児三人の成長を樂しみに働いた。愛児の爲に一生懸命に働いてゐる事を聞いた水谷校長が夫人を裁縫教師に迎へていと話をしたら夫人は驚き、私みたいな教育のない者にはどうも人様の先生になせぬと何度も断つたが校長さんばしきりに勧めて先生とした。けれども「ミシンの使ひ方もよく出来ない」とを知つた夫人は、思切つて東京で「ミシン」を本當に勉強し、立派な裁縫教師としての免状をとつて立つてゐるのは廣瀬中佐と杉野兵曹長の銅像であつた。上京するや第一番に夫人は亡き夫の前にいざまづいておそばに参り立派な教師となつて子供を養ふため、一年間おそばで勉強させて頂きますと心をこめて祈つたといふ。その話を聞いた兵曹長はどんなに天國で歎んで居たか。夕暮は町々を納豆賣りに歩き夜は内職の「ミシン」を踏んで愛児の學費をかせり、毎日一寸と休まないで、苦しい淋しい生活をしたが併し我が子を立派な軍人にする爲であれば一切の苦勞もたかでもなかつたと云ふ。それだけ夫人はえうかつた四十位の婦人が納豆を賣つてまで愛児の學費をかせくたとは到底普通の者に出来ぬ事である。

楠木 正成

海野 輝雄

嗚呼思ひおこす湊川！楠木正成は湊川で華々しく戦死したけれども、その名は永遠に残りてゐる。あの正成の誠忠は誰一人として較べものにならない。勅命を拜し一身一家を忘れた忠勤を耐んだのは實に大忠臣たる所以である。僕も正成にならう。忠孝を旨としよう。今こゝに湊川の戦況の一端をのべて正成のえらさを幾分でも傳へたいと思ふ。……戦は五月二十五日の午前十六時から始まつた。正成は弟正季と共に菊水の旗をなびかして大軍に駈入り奮戦して敵をなました。この間に和田岬の方では、尊氏の水軍の先鋒が岬と東に通過ぎやうとした。義貞はその二をを防がうと、海岸に沿つて東に退いた。其の隙についで残り水軍は一時にとつと和田岬の上陸し、その一部は正成に向つて後から攻めかゝつた。正成はかく前後に敵を受けたけれども、軍の中を縦横にかけまはつて大いに奮戦したため、敵は一時須磨方面に退いた。この時直義が奥の馬は矢尻と蹄に立て、右の足をひきつて困つてゐる時に乗り、正成は今少しでこれを討つて了した。すると直義の家來薬師寺十郎が唯一騎取つて返し馬から飛下り、その馬を直義に進めさせた。防戦した為には直義はやつとのことと命が逃れた。……このやうにして正成は天皇の爲に奮戦したけれども遂に戦死した。今宮城の前に楠木正成の銅像が目を輝かして護つてゐる。正成は建武の中興を作りなして君に忠義をつくした。吾々は偉人楠木正成に對して深い感謝の念をこたへべきである。僕も將來正成のやうな偉人になるやう心掛けよう。



萌ゆる若草

青年 學子校 だより



海軍記念日を迎へて

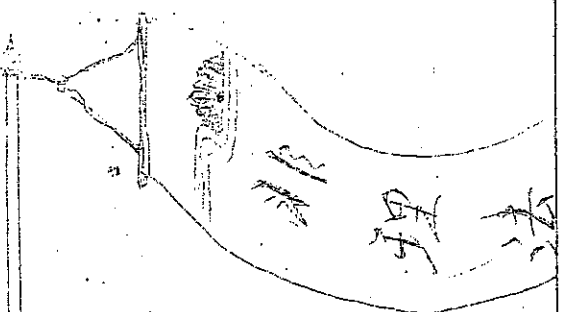
某歴史家は水はむしサラムリスの海戦上於てギリシヤが敗を取つたならば、世界文明が敗を取つたならば、歐洲の形勢は之がために一変したであらう。若しトラファルガーの海戦に英國が敗を取つたならば、黄色人種の運命は落日も同様であつたであらう。……と云ふことを聞たが、吾人は今でこそ、此の様な戦捷の思出を語り得るものゝ、之が隔一勝敗地を換へて居つたならばどうであるか。實に凄惨の極を想像するたに戦慄をおぼゆるのである。當時東郷提督が旗艦三笠、楯上高く掲揚せられた。

皇國の興廢此の一戦に在り各員一層奮勵努力せよ

……只に軍人のみならず、一般國民の頭上高懸すまでもなく、永久に掲揚せられてゐるものと思ひを付けばならぬ。之實に振古未嘗有の大戦と共ニ萬世に傳へべき金言である。今や國家の非常時に際會し當父島に在つても防護團の訓練に一倍の力を致さんとす。時に方り願ひて感概深ましもある。

五月二十九日 現在 男子部 在 藉者

研究科	本科	四	本科	三	本科	二	本科	一	合計
五	一	〇	一	五	三	〇	五	五	一一五



五月二十五日大楠公漢川戦死の日

大楠公軍旗銘
「非理法權」天

譯、非理に勝たず理に法に勝たず法に權に勝たず權に名に勝たず

昭和十二年五月

大楠公軍旗の辨
大村學堂高等小學校 大村編輯部発行

